

「彼らは知ろうとせず、理解せず、闇の中を行き来する。地の基はことごとく揺らぐ。」
(詩篇82篇5節 新共同訳)

ポストモダニズムの世界

「あなたの考えには賛成しないが、あなたの考えが間違っていると言っているわけではない。」

「あなたに都合がいいというなら、それはあなたにとっての真理に違いない。」

「私たちの意見はお互いに正反対ではあるが、どちらの考えも正しい。」

「誰もが正しく、間違っている人は誰もいない。」

このような考え方(ポストモダニズム)は近年、急激に脚光を浴びるようになった。もはや、神をふくめ、絶対的なもの、不変の基準はない、というのである。したがって、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」(ヨハネ 14:6)というキリストのことばは、決して受け入れることのできないもののひとつとなる。

ある人が著名な神学校のキャンパスで、ポストモダンの考えに立つ神学生とこんな会話をした。

「あの木の下にあるのは何ですか」

「ベンチです」

「私にはスイカに思えますが、違いますか？」

「いいえ、あなたの考えは間違っていない」

同じ人が、やはり超名門と言われる工科大学でポストモダンの考えに立つ学生に尋ねた。

「2プラス2はいくつですか」

「4です」

「私は7だと思うのですが、間違っているのでしょうか」

「いいえ」

「では私の考えは正しいと思いますか」

「いいえ」

「それでは、私の考えは間違っていると思うわけですね」

「いいえ」

「じゃあ、私の考えは正しいと？」

「いいえ」

この学生の専攻は土木工学であった。彼の設計した橋を果たして安心して渡れるだろうか。

このような考えに立つなら、人は何を信じようが構わないし、どんなことをしても、それを悪と決めつけることは僭越なことになる。このような考えは、一見、だれをも傷つけないように思えるが、いかなる間違いも、犯罪も、悪意も、人によって受けとめ方はさまざま、という理由で、世界は無法地帯とならざるを得ない。そしてそれは今や現実となりつつある。無差別殺人は、イスラム国の専売特許ではなくなった。ごく普通に見える人々が犯人であった。一体、彼らの頭の中に何があったのか。それは、だれにも当てはまる神の基準と道徳律を、今や日本のみならず、世界がかなぐり捨てていることと無関係ではない、と思わざるをえない。

ポストモダンというが、実は、エデンの園において、蛇の姿をとった悪魔が「罪は罪でない」と言い切った歴史最古の嘘と酷似している。私たちは騙されてはならない。「思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、刈り取りもすることになります。自分の肉に蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、御霊に蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです」(ガラテヤ人への手紙 6:7,8)。

